

クローズアップ

# NGO・NPO

特定非営利活動法人

## ルワンダの教育を考える会 ～ルワンダの悲劇から学んだ教育の大切さ～

### 日本人との出会い

アフリカ・ルワンダ出身のカンベンガ・マリールイズは、ルワンダの専門学校で洋裁の教員をしていました。そこに、日本から青年海外協力隊が派遣され、一緒に働いていた私を日本の研修に推薦してくれました。そして、一九九三年に初めて日本に研修に来ました。二カ月間の日本語研修の後、八カ月間は福島県の文化学園という専門学校で洋裁の勉強をしました。

帰国直後の一九九四年四月、首都キガリで内戦が勃発、ラジオは「大統領が殺された。外へ出ると危ないから家にいなさい」と繰り返されました。そんな状態が何日も続き、一体何が起きているのか、これからどうなるのか、日本に研修に来ている間に一体ルワンダはどうなってしまうのか、と頭がパニックになりました。

国軍と大統領軍との争いに巻き込まれて、近所の家族はほとんど殺され、私たちも発見されると殺されてしまつたというこの地域は、非常に危険な地域でした。安全な場所に逃げたいという一心で子どもを抱き、必死に歩きました。

内戦が起こった日から二日間、日本のホームステイ先の家族が心配して電話をくれました。三日目から電話も通じなくなつたので、彼らは私が死んでしまつたと考えていると思い、生きていることを知らせるために日本にFAXを送ろうと思いました。

ザイルのゴマ難民キャンプにあったFAX屋へ行き、ひらがなで「げんきです。にげるこ

とができます。いたら、ある人に日本語で話しかけられました。その人は、AMD Aから派遣された日本人医師でした。その日に難民キャンプへ到着し、その無事を伝えるためにFAXを送ろうとしていたのです。私のひらがなを見て驚いたようでしたが、彼は通訳を探していたので私は片言の日本語で通訳をすることにしました。

たった二カ月間の日本語研修のお陰で、難民キャンプ生活を家族そろって無事に過ごすことができました。私と日本語の関係を物語っています。

安全な所で子どもを育てたいという私の願いを日本の友達が叶えてくれ、私は福島県にある短期大学に留学することができました。こうして私たち家族六人全員は、福島に移住することになったのです。

### 私にできること

日本にいながらも、ルワンダのためにでき



↑ルワンダの夕日



↑カンベンガ・マリールイズのいのちの尊さ、教育の大切さを訴える講演活動で全国を駆け回る

NPO 法人ルワンダの教育を考える会

〒960-8055 福島県福島市野田町 4-8-20

TEL & FAX

024-533-8289

e-mail : info@rwanda-npo.org

ることを探すのは自然なことだと思えます。日本語を通して教育の大切さをしみじみ感じている私だからこそできることは何だろう。それは、親を亡くしたり、希望を失ってしまったルワンダの子ども達に教育の基盤を与えることではないか。そんな思いで、「ルワンダの教育を考える会」を立ち上げ、二〇〇一年八月、「ルワンダの教育を考える会」がNPO法人として福島県から認可されました。



↑ウムチヨムイーザ学園の先生と生徒たち



↑丘の上から見たウムチヨムイーザ学園

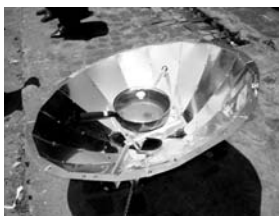
い子どもたちも学ぶことができる総合学園ウムチヨムイーザ学園（幼稚園から大学まで）を目指して、一九九九年ルワンダ政府から学校建設を許可され、二〇〇一年九月、二教室が完成し、六〇人の生徒と四人の教師で開校することができました。毎年子ども達が進級できるように一年間に二教室を建設

することを目標に、これまでに二三教室を建設、生徒数三九一人、教師一五人になりました。二〇〇七年には、一八人の卒業生を送り出すことができました。また、ルワンダでの体験を通して、ルワンダのことを理解してもらいながら、命の尊さ、教育の大切さ、平和への大切さを語り少しでも多くの方々に、ルワンダの実情を知っていただきたいと全国各地に飛び回り講演活動をしています。

そのほかに、ルワンダのストリートチルドレンがバナナの木の皮を使って作ったカードやルワンダのコーヒーや紅茶を販売して、それをルワンダの学校建設の資金にしています。ルワンダの生活や文化を写真を通して紹介するイベントや、ルワンダの自立支援に関する事業をしています。

### 新しい取組み

ルワンダは内戦の混乱で、電気などの供給が不十分でした。首都キガリにあるウムチヨムイーザ学園にソーラーシステムを贈り、学校に必要な電力の自給、生徒たちの教材、親たちへの夜間の識字教室に役立てたいとプロジェクトを立ち上げました。二〇〇七年S氏の紹介により、T社から手作りソーラーパネルの寄付を、また福島県国



↑日本の皆さんのおかげで送られたソーラークッカー

際交流協会からも助成金を受け、プロジェクトが本格的に進められることになりました。

一〇月にはソーラー発電システムとソーラークッカーを学園に設置することができ、三部屋に灯りが灯り、ノートパソコンが起動できるようになりました。ソーラークッカーを使いおいしい料理ができたという報告も届いています。

### みんなのちがひ

教育は平和と発展の鍵だと思っています。その鍵はどの子にも渡してあげたい。それを使ってあちらこちらを開けて生活をよりよくし、平和のために使って欲しいのです。

ルワンダにはこのようなことわざがあります。「二人のちからは小さいけれど、みんながちがいを合わせれば大きなちがひになる」これまで、「この「NPO法人 ルワンダの教育を考える会」がこれまで頑張ってきたけれども、多くの方々がルワンダに関心を持ち、そこで、何かできることを一緒に考えてくださっているからだと思います。たくさんの人に出会い、たくさんの方々の支援、たくさんの方々の優しさに感謝しています。

これから、たくさんの方々の夢を現実にできるように頑張っていきたいと思えます。



↑学園の子ども達の笑顔

# クローズアップ NGO・NPO

ブータン難民の支援団体

## アフラ・ジャパン (AHURA JAPAN)

### 設立のきっかけは

一九九〇年にアムネスティ・インターナショナルがブータン国内の人権侵害を取り上げ、民主化運動家の釈放を求めた時、奈良の四五グループがその中の一人、ラタン・ガズメルさんの担当になりました。ラタンさんが釈放された後に難民となり、ほかの難民とともに亡命先のネパールで Ahura Bhutan を設立しました。

一九九三年三月に代表のリングホーフアーさんがネパールを訪れた時、ラタンさんに日本での支援を求められました。幸いに京都在住のイギリス人女性、シーニー・ドナルドさんがブータン国内の虐殺および追放を自分の目で見た後、日本でリングホーフアーさんに紹介され、七月七日に AHURA JAPAN (= Association of Human Rights Activists) を設立しました。

### 組織と特質

会員が全国にいます。関西には一番多いので、関西が活動中心となりま

す。ネパールの協力団体の



↑難民教育担当のCARITAS事務所で教育提供 (2008年2月)

Ahura Bhutan では常に連絡を取り、最新情報を得ています。Ahura Bhutan は一九九三年以来、難民の documentation を書物、ブックレットおよびCD-ROM 等で作成し、そのうち AHURA JAPAN の奨学金の運営も信頼できる形で行ってきました。

さらに、AHURA JAPAN の特徴として述べられるのは、会員はみな自費でネパールへ行くことになっています。

### 現在に至る活動内容

AHURA JAPAN は一九九三年に政治的解決を望んでいましたので、ブータン国王をはじめ、インドとネパールの大統領や首相宛に葉書で平和的解決のために努力を呼びかけました。

難民支援は物質面と奨学金提供が中心となっています。一九九三年は難民の記録を実施した Ahura Bhutan ヲビデオカメラおよび拷問された難民二二〇人に治療費を提供しました。ネパールの難民キャンプでは高校一年生までの教育しか受けられませんが、九四年以降高校二年と三年をレベルの高いインドの mission school で受けるように一〇年間で、七六人の高校生を送りました。その中に Darjeeling 地域で三〇〇人以上の卒業生でトップ成績の奨学生もいましたし、また写真の通り、難民キャンプで初めての女性校長(中二と高一の学校)となっている方も AHURA JAPAN の奨学金を受けていました。

アフラ・ジャパン

〒630-8044 奈良県奈良市六条西 2-9-21 TEL & FAX 0742-41-5811

e-mail : ahurajapan@gmail.com URL : http://www.geocities.jp/ahura\_japan\_org/index.html



↑ラムナ校長 (2008年2月)

そのほかにも難民キャンプの学校先生一二人以上〇人以上に遠距離教育費と

して一人に三〇〇〇円から二万円までの助成金を提供しました。

二〇〇四年以降、ネパールの内戦のため面接ができませんでした。その代わりに Anura Bhatta の組織で活動した後、インドで大学生になった方の教育と生活費を支援しました。

または、UNHCR の提供が少なかったため、難民の要請に応えるように、九六年以降現在に至るまでに合計一トの重さを超える教材(文房具、百科辞典、図書、顕微鏡、算数セット、実験用のプラスチック等)、楽器、スポーツ具、おもちゃなどを持っていきました。

そのほかに前記のラタンさんを一九九四年と二〇〇三年に日本に招待し、関西と関東で講演してもらいました。一九九九年と二〇〇〇年に難民 study tour を実施し、ネパールのブータン難民およびチベット難民キャンプを見学し、直接教材などを寄付しました。

AHURA JAPAN の代表が六本のブータン難民の問題についての論文を執筆し、そ

して二人の会員が学士論文でブータン難民の女性と教育を取り上げました。協力体制の強い三重大学の児玉克哉先生のおかげで二七ページのブックレットおよび二五分のDVDも完成しました。

京都の美術館にもほかの国々の子どもの絵とともにAHURA JAPAN 所有のブータン難民が書いた絵の数十枚をPASS という児童画の国際交流を進めるNPOのおかげで展示をすることができました。

### 資金作りと教材提供

上記の奨学金などの活動を可能するため、バザー、寄付と講演料でまかないます。販売する品はネパールとブータンの民芸品、紅茶、カード等の小物が中心ですが、時々リサイクルのバザーも行います。バザーと講演は主に関西で実施しますが、時々関東にも出かけます。講演依頼はNPOおよび地方自治体が主になりますが、学校にも呼ばれることがあります。関西の有名な ONE WORLD FESTIVAL にも一回参加しました。

関西の小学校から高校まで教材および寄付金をいただきました。難民の高校生と文通の制度もできました。大手新聞の奈良版をはじめ、奈良市のタウン誌、民間のラジオ局にもよく取り上げられました。反応は残念ながらほとんどありませんでした。関西版や全国の記事が出て同じように何度も絶望的な気持ちになりました。

教材提供は地元からかなりいただいていますし、バザーの時には会員以外の方に手伝っていただくことも多いです。しかし関西では地名程度が少し高いとは言え、全体的に見て、関心が薄いためにAHURA JAPANは思うように拡大していません。

そのほかに、数年前に外務省の草の根基金に応募しようとした際、二人で数週間に渡ってあらゆる努力したにもかかわらず、活動証拠がないために断られました。高校卒業証明書が証拠になると考えた私たちは大きなショックを受けました。

国側、地方自治体およびマスメディアが小さなNPOに対する理解および支援が十分ではないという気持ちを痛感しています。

### 課題

昨年からはインドの大学で勉強してきた学生を博士課程後期の三年間に日本で勉強できるための資金作りをしてきましたが、まだまだ初年度の学費と生活費が用意できない状態です。

受け入れていただける教授がいますので、目標をまだ達成できないのは残念です。

そしてブータン難民に対する世界的な無関心および国連の努力不足のため、今年からすでに第三国への移住が実施され始めました。難民社会が揺れています。このような状況でAHURA JAPANは今後どのような対応すればよいのは大きな課題が残っています